

Title	歌謡と口承—ドイツ民謡研究の生成と展開
Author(s)	阪井, 葉子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49131
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	坂井葉子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第21648号
学位授与年月日	平成20年1月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	歌謡と口承——ドイツ民謡研究の生成と展開
論文審査委員	(主査) 教授 林 正則
	(副査) 教授 玉井 暲 准教授 伊東 信宏

論文内容の要旨

本論文は、ドイツ語圏における「民謡」研究の歴史を、特にその黎明期、すなわち 1770 年代初頭のヘルダー『オシアン書簡』に始まり 1810 年代のグリム兄弟による民謡収集(未刊行)に至る約 40 年間に焦点を合わせて検討したものである。序章、7 章からなる本論、結語、参考文献一覧で構成され、A4 判 214 ページ(400 字詰め原稿用紙換算で約 600 枚)である。

序論では、ヘルダー以降議論の喧しい「民謡 (Volslied)」と「フォルク (Volk)」という 2 つの曖昧な概念の輪郭とその歴史的な変遷が素描される。とりわけ「フォルク」概念の多義性が、一方では民謡研究を活性化してきた半面、他方ではその全体像を見通しにくいものとしてきた消息が明らかにされる。序論の後半では 1770 年以前の民謡を取りまく文化状況、また 1820 年以降の民謡研究の進展が概観されている。

第 1 章では、時代に先がけて口承文芸の価値を発見しドイツ民謡研究の草分けとなったヘルダーの仕事が論じられている。彼が『オシアン書簡』(1773 年)、『民謡集』(1778/79 年、没後改訂版『民謡における諸国民の声』)等で、「無学で感覚的なフォルク」の歌、「死んだ文字」によってではなく聴覚を介して伝承される「生きた言葉」の価値を主張し、文化の真の担い手としての「社会の基層部分」に目を向けることで、18 世紀の啓蒙主義的な価値秩序(過去と現在、進歩と後進、中心と周縁、文明と未開、学識と無学など)を根底から逆転させようとしたその意図と試みが、詳細に具体的に跡づけられている。

第 2 章では、ヘルダー民謡論への賛同と批判、それを受けたヘルダーの民謡観の変化、そうした一連の議論の推移と、それに対する後世の評価が論じられる。ヘルダーに共鳴したビュルガーは、民謡の本質を「通俗性」に見出した。彼のあまりにも性急な「通俗性」論はヘルダーを含めた同時代人から厳しく批判されたが、民謡の「うたい崩し」の問題を指摘するなど、論者はビュルガーの民謡研究における積極的な役割にも言及している。一方、啓蒙主義者ニコライの民謡集『うるわしの小年鑑』(1777/78 年)は、元来ヘルダーの民謡論を揶揄することを意図していたが、民謡を理想化しようという意図を持たず、「口承の現場」に目を向け、多数の歌に曲譜を添えて出版したことで「民謡研究史上きわめて重要かつ特異な」位置を占めることになった経緯が明らかにされている。ニコライの批判を受けて、ヘルダーが「フォルク」と「賤民」を区別し、「うたう行為」に「フォルク」の決定的な属性を見、民謡の本質的な要素として“Weise”(旋律)を考えるに至ったことが指摘されている。

第 3 章では、ニコライの『うるわしの小年鑑』とその影響がさらに立ち入って論じられている。資料収集に際してニコライが採った実証に徹した方法、その出版形態のユニークさなどが具体的に検証されている。

第4章では、「民衆啓蒙」をもっぱら意図して編まれたベッカー『ミルトハイム歌謡集』（1779年初版、1815年改訂版）が取り上げられる。そこに収録された民謡のほとんどは、同時代の詩人・作曲家による作詞・作曲で、従来の「古謡」としての「民謡」には当てはまらず、「民謡調歌曲」と言うべきものであった。しかしベッカーは、農民、職人など受け手としての「folk」を明確に意識し、『歌謡集』収められた歌謡の少なからずが「folk」のなかに浸透し歌われるようになったという事実によって、民謡研究史に特異な位置を占めていると論者は述べている。

第5章では、グレーター、フォン・デア・ハーゲン、ビュッシングの3人の民謡研究者の仕事が検証される。グレーターは民俗学的な関心から民謡研究に向かい、民謡の本質を「口承性」「歌唱行為」に見出し、その音楽的な側面（旋律だけでなく、声の強弱、ポルタメント、テンポの緩急、歌の現場での即興性）こそfolkの真の姿を生き生きと伝えるものとした。彼は民謡研究におけるフィールドワークの重要性を強く意識していた点で先駆的な存在であったと論者は述べている。フォン・デア・ハーゲン、ビュッシングの共著『ドイツ民謡の集成』（1807年）は、原資料と口承の現場に忠実であることを民謡研究者の義務とする考えに立ち、できるだけ多くのヴァリエーションを比較して「正しい」ヴァリエーションを決定するという「歴史批判的」方法において際立っており、のちのフィールド調査の方法を先取りしていたことが指摘されている。

第6章では、民謡収集の金字塔とされているアルニム、ブレンターノ編『子どものふしぎな角笛』（1805/08年）の成立過程を辿り、「民謡をうたうfolkという鮮烈なイメージ」が編者たちの民謡収集の原動力であったこと、その意味で彼らには社会的な階層・身分の明確な概念がなく、むしろ「表象されたfolk」像においてヘルダーとの衣鉢を継いでいることが明らかにされる。また彼らの（特にブレンターノによる）民謡テキスト改変の具体例を検証することで、『角笛』の独自の性格を浮き彫りにしている。「うたうfolk」を理想化しながら「folkの教師」として「歌をfolkに返そう」とするという編者たちのfolk像の矛盾が指摘され、また曲譜のない『角笛』が結局は「そのままではうたえない民謡集」に終わった消息が明らかにされている。

第7章では、従来ほとんど顧みられなかったグリム兄弟の民謡収集（生前未刊行）が検討されている。彼らとアルニムとの間で交わされた「いにしへのポエジー」をめぐる論争を検証し、「現代人もポエジーの生成・流転に参加する権利を有する」としたアルニムに対して、彼ら（特にヤーコブ）が「文学・詩は古ければ古いほど完全で純粹」であり時代とともに墮落の一途を辿ったとする「退化史観」に立ち、「いにしえ」を絶対的基準としたことが明らかにされている。また、彼らが「folkの文学」と「国民文学」を重ね合わせ、「ドイツ」、「ゲルマン」に拘った事実とは裏腹に、外国民謡、特にスラヴ民謡にも強い関心を抱いていた点に論者は注目している。

結びでは、民謡研究の黎明期が、「国民文学」の成立期と重なってドイツのナショナル・アイデンティティ探求の過程で「社会の基層文化」に関心が向かった時期であり、それゆえに民謡の担い手たる「folk」の理想化が行われ、folk概念がいわば「創造的な虚構」として機能したこと、しかしそうした動きが同時に「口承の現場」への接近を促し、フィールド調査に基く新たな民俗学研究への道を拓いたとの総括がなされている。

論文審査の結果の要旨

ドイツ語圏における「民謡」研究の歴史は、「民謡 (Volkslied)」と「folk (Volk)」という二つのきわめて多義的な概念をめぐる多彩な詩人・作家・研究者が参加する錯綜した議論のネットワークを形成し、その結果今日に至るまで、ドイツの文化状況全体を縮図として映し出す凹面鏡のような役割を果たしてきた。それだけに民謡研究は、文芸学、音楽学、民俗学、社会学、歴史学などが交錯する学際的な領域として、とりわけ広い視野と知識が求められる研究分野と言ってよいであろう。本論文は、18世紀70年代のヘルダー『オシアン書簡』に始まり19世紀10年代のグリム兄弟による民謡収集（未刊行）に至る約40年間に焦点を合わせ、ドイツにおける民謡研究の誕生と生成と展開とを詳細に跡づけるという、困難な課題に挑んだわが国最初の本格的なドイツ民謡研究史である。

本論文で扱われている民謡研究の黎明期は、啓蒙主義から古典主義、ロマン主義に至る「ドイツ国民文学」の成立期と重なり合って、さまざまな文化思潮が複雑に錯綜する見通しの利きにくい時代であるが、「自然」「folk」「いにしえ」という重要な概念を束ねるものとして、論者は「歌う」というキータームを発見し、それを自在に使い

こなしながら鮮やかに時代を読み解いていく。そして本論文の最大の功績は、ビュルガー、ニコライ、ベッカー、グラーダー、フォン・デア・ハーゲン、ビュッシングなどこれまで民謡研究史のなかでほとんど注目されてこなかった文人・学者たちを積極的に取り上げて、彼らの業績を詳細に具体的に検討し、「民謡」という限られた分野に映し出された時代と文化の地殻変動ともいべきものを見事に浮き彫りにしている点であろう。

ただ、本論文では多義的に使用される Volk を、一貫して原語のカナ表記「フォルク」と記述しているが、「フォルク」が日本語の学術用語として成熟していないだけに、違和感を拭い得ない。コンテキストに照らして民衆、民族、国民、民俗などそのつど適切と判断される訳語を用いた方が論旨が明確になったように思われる。また本論文の対象である 40 年間という時代の区切りは、ほとんど同時代と言ってもよいが故に、時系列に沿った論述とは違った論の構成もあり得たであろうし、夥しい年代・人名が出てくるだけに年表、索引が添付されれば理解に資するところ大であったであろう。とは言え、それらは本論文の民謡史、民俗史、文学史研究に対する寄与をいささかも損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。